

- *使徒の働き 15章に記されている、いわゆる「エルサレム会議」において、ペテロはじめエルサレム教会の人たちとパウロ達はそれぞれが別の対象に福音を伝道していこうと取り決め、握手をして別れたはずである。「ところがケパがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。」(ガラテヤ2:11)もともと、「エルサレム会議」では、条件があった。使徒 15章 19~21に見られるように、「偶像に供えて汚れた物と不品行と絞殺した物と血を避ける」ことを互いに認めた。これは、異邦人がユダヤ人との交わりでどうしたらよいか悩むことがないように、また、ユダヤ人が最低限度の律法を守ることができるように、互いの配慮を求めたものであった。
- *ユダヤの律法では、ユダヤ人と異邦人が一緒に食事することは禁じられていた。しかし、主イエスはその垣根を取り払って、よく異邦人と食事をされた。ペテロを初め弟子たちも一緒であった。初期のクリスチャンの食事には特に意味があった。当時はキリストのからだに血にあずかる「聖餐」と、人種や貴賤の別なく共に食事をする「愛餐」がまだはっきりと分かれていなかったと思われる。食事はすべての人はキリストにあって一つであるという福音の大切な真理を表わす場であった。使徒 10章に詳しく書かれている通り、「一度も聖くないもの、汚れた物は食べたことがない」というペテロに対して「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない」という声があった。その後コルネリオという異邦人ローマの百人隊長の所に行って福音を語り、御霊によって皆が救われた。このような経験を持つペテロは、最初は当然、異邦人とも一緒に食事をしていた。しかし、「割礼派の律法主義的クリスチャン」の圧力に屈してしまったのである。
- *ペテロは主イエスの一番弟子であり、行動家であり、自信家であった。しかし、反面臆病なところもあった。イエスの十字架の直前、イエスのことを3回知らないと言った。神を恐れずに、人を恐れた故である。その後、復活のイエスに出会い、再献身して福音伝道の重要な使命を担い、実行した。私たちはパウロにつくかペテロにつくか。ペテロの失敗は、弱さやもろさの表れであることを思う時、「心情」的にはペテロ、福音の真理を徹底的に貫き、生き方の基本をいつも示してくれるので「信条」的にはパウロか。しかし、二人とも大伝道者であったことには違いがない。そして、二人ともイエス・キリストから遣わされた「人」であることを忘れず、私たちが信仰し、信頼し、従うのは主イエスであることを確かめたい。